第２回
県立高等学校あり方検討会
議事録

令和２年１０月２７日（火）

高校教育課高校魅力化推進室

【事務局】
〇皆様、こんにちは。定刻となりましたので、只今から、第２回県立高等学校あり方検討会を開会します。
　最初に、委員の皆様方におかれましては、先週２０日に行いました、球磨中央高等学校・熊本西高等学校の学校視察には大変御多用の中、御参加いただきまして誠にありがとうございます。改めましてお礼を申し上げます。
　次に、本日の日程でございますが、配付資料１ページにございます会次第に沿って行い、１６時の終了を予定しておりますので御協力をよろしくお願いします。
　次に、本日の検討会の出席者の確認をさせていただきます。資料の３ページをお願いします。奥田委員につきましては、オンラインでの出席となります。なお、田中委員・内村委員・夏木委員は本日、所要のため御欠席でございます。
　本日は、９名の委員の皆様に御出席いただいており、６ページの設置要項第６条第２項の規定に基づき、本検討会が成立します事を御報告します。
　それでは、今後の議事進行については設置要項第５条第２項に基づき半藤会長にお願いします。半藤会長よろしくお願いします。

【半藤会長】
〇皆様こんにちは。着座のままで失礼します。第２回の県立高等学校あり方検討会に御参集いただきましてありがとうございます。オンラインでの参加の奥田委員もありがとうございます。よろしくお願い申し上げます。
　先週の学校視察では、各校の意欲的な取組みをたくましく感じる事ができ、大変参考になりました。一方で見えにくかった部分、例えば立派なプレゼンをする生徒さんがいる一方で、皆が同じような能力を獲得できているのかなどについても、しっかりと見極めて学校づくりについて考えていく必要があるなと感じたところでございます。本日、様々な案件がありますけれども、ぜひ率直かつ高い見識からの御意見、縷々いただければと思っております。
　それではまず、議事（１）で、会議の公開・非公開についてお諮りします。これにつきましては、本検討会の運営要領第５の規定に則り、関連する協議内容に応じて、冒頭で公開・非公開の協議をしていただく事としています。本日の検討内容につきましては、特に非公開とすべき案件はなく公開するという事に特に支障はないと考えられます。よって本日の検討会については公開とする事でよろしいでしょうか。
　それでは公開とする事に決定します。
　では早速、議事の（２）「県立高等学校再編整備等基本計画の成果と課題（概要）」について事務局から御説明をお願いします。

【事務局】
○それでは議題議事の（２）基本計画の成果と課題（概要）につきまして、第１回の会議でいただいた御意見を踏まえ、資料を修正しておりますので御説明します。

資料１の３ページをご覧ください。資料の左側でございますが、今後の方向（事務局案）をご覧ください。この項目は、前のページの県立高校の再編整備のまとめにあたる部分です。上から５行目の部分ですが、ＩＣＴの活用により小規模校の課題を「解消」と記載しておりましたが、現段階ですべて解消というのは難しいと考え、「改善」と改めております。

次にその右の列、適正規模の大規模校に係る項目について修正を行っております。前回の会議で、事務局から「大規模校が所在する県央学区の中学校卒業者数が、計画策定時に比べ増加しているため、学級減の削減を実施していない。また今後も中学校卒業者数の動向を見極めていく」と御説明をしました。これに対し、県央学区内で大きく定員割れをしている学校もある中、県央学区の卒業者数が減っていないという理由だけでは説明が不足するのではないか、という御意見が出されました。

そこでこれにつきましては、参考Ａ－１という資料をご覧ください。この資料で、上のグラフは県央学区の中学校卒業者数の推移を示しております。下のグラフは、旧熊本学区の状況です。いずれのグラフでも、平成１９年に見込んでいた卒業者数を示す黄色の部分よりも、実際の数を示す赤の部分は高い水準で推移しております。また今後も、総じて現在と同程度の水準で推移する見込みである事がお分かりいただけるかと思います。従いまして、県央学区・旧熊本学区のいずれの区域で見ても中学校卒業者数は、計画策定時の見込みよりも増加しており、しばらくはその傾向が続くため、現時点での大規模校の学級減は生徒の進路を狭める事になると考えております。

次に参考Ａ－２という資料をご覧ください。これは、令和２年度に入学した熊本市内の生徒の昨年度の９月時点での進路希望と、実際の進路状況を表したものです。中学校３年生時点での進路希望を見ると、青の熊本市内の公立高校への進学希望者は４，５２３人、オレンジの私立高校の進学希望者は１，３７７人となっております。下のグラフは実際の進学状況ですが、公立も私立も３，０００人弱となっております。この結果、熊本市内の公立高校への最終的な進学者は、希望していた生徒の７割程度にとどまっており、このデータからも大規模校の学級減がさらに生徒の進路を狭めると考えております。

資料１の３ページにお戻りください。これらの状況を踏まえ、大規模校の学級減を行わない理由として、前回記載していた県央学区の中学卒業者数の増加以外の理由に加え、旧熊本学区の生徒数も減っていない事、また熊本市内の公

立高校希望者の公立への進学が７割程度にとどまっている事などを追加して記載しております。
　続いて５ページの右列、総合選択制について御説明します。前回の会議では委員に、再編直後と現在の状況の比較など具体的な状況を示したほうが良いとの御指摘をいただきました。また実効性の高い魅力づくりのため、地域の人材を活用するような運営も考えてはとの御提案をいただいたところです。これについては、参考Ｂという資料をご覧ください。
　ここでは、１番長く総合選択制を実施している前期再編校３校と先日、御視察いただきました球磨中央高校を取り上げ、高校ごとに開設されている総合選択制の科目数の推移をまとめております。生徒数の減少により教員数が減る中で、若干科目数が減少はしておりますが、現場の努力や工夫により、概ね開設当時の数の維持が図られているのではないかと思っております。また委員から御提案がありました地域人材の活用につきましては、生徒が様々な人と関わる事や専門性の高い人材に触れることで、より豊かな教育につながるといった効果が期待できると考えますので、学校のほうには十分伝えていきたいと思っております。
　Ａ３資料の５ページにお戻りください。総合選択制の今後の方向の修正ですが、今回のあり方検討では、今後ＩＣＴを活用して高校教育を充実することは重要なテーマとなっております。総合選択制でも、ＩＣＴを活用して他校の授業を履修することなどにより、この制度を充実させていくことを追加して記載しております。説明は以上でございます。

【半藤会長】
○前回の議論を踏まえまして、修正点について御説明をいただきました。御説明に関して何か御質問等がありましたらお願いします。

【足立委員】
○５ページのＩＣＴの活用でございますが、先般、熊本西高校に行きましたところ、かなりＮＴＴだとか、ソフトバンクだとかいろんなところとの授業も実際されているようなので、学校だけではなく、そういったところも含めるというのはどういうことなのでしょうか。現実に、もう現場でやられているようですけども。
【事務局】
○すいません。今、足立委員がおっしゃったことは、先日視察した熊本西高校の事でございますね。確かにそういったところもあるのですが、今回こちらに記載しておりますことが、総合選択制を導入している学校について記載をして

おりまして、高校によっては企業とかＮＰＯとかそういったところと連携をされている可能性としてはあるかもしれません。すみません、そこは十分把握をしていないところです。

【足立委員】
○私が言いたいことは、高校同士だけではなく、もう少しウイングを広げられたらいかがかなと、もう実際そういう方向に高校がいっているような印象を受けたものですから。あとはお任せします。

【事務局】
○後ほど、あり方の報告のところでも御説明しますけれども、多様なパートナーとの連携を前提に、今後考えていきたいと思っておりますので、そこは踏まえたうえで取り組んでいきたいと思っております。

【半藤会長】
○事務局の考え方は、おそらくＩＣＴを使うことで様々な授業方法の多様化が図られるだろうという見込みのもと、課程の中に収めるべきプログラムもあれば、今、足立委員がおっしゃったような、多様な領域を活用して、学校全体の教育の色々な可能性を広げていくということも考えられると思うので、そういうことを幅広く進めていこうというお考えでよろしいですね。そういう趣旨ということで、ここは御理解いただければと思います。他にお気づきの点等はございますか。

【吉永委員】
○事務局案の今新しく示されましたＩＣＴに関してですが、ここに書いてあるようなことについては非常に賛成であります。もっと幅広くできないかなと思っております。その理由は、義務制の学校は１人１台の端末が入ります。うちの町辺りでも全部入りまして、これから本格的に活用を始めていきますが、中学校３年生については、残りの使える期間が短いのでそうでもないのですが、１年後位はかなり頻繁に活用して授業の中でもＩＣＴに関して興味関心を持つ生徒が増えてくるのだろうと予想しています。そういう子どもたちが高校を選択するというときに、せっかく慣れ親しんで自分も興味が湧いた、そういう科目学科がある高校を選択する可能性が広がるのではないかなと思うところです。ですから、今後の方向にこういったものを入れるということについては、非常にいいのではないかなと思ったところです。

【半藤会長】
○資料５ページの今後の方向性で、赤字になっている修正案のところですけれども、恐らく、ここに記されております「他高校で開設されている科目を履修する」などというような明示は、大変望ましいことではあるのですが、総論は賛成だが、各論になったときにこの授業をどこまで公開するのか、これはうちでやっているのだから、なかなか全面的に公開できない、うちの学校の努力だというようなことになると、せっかくの計画が順調に進まないということもありますので、色々と乗り越えていかなきゃいけないところもあろうかと思います。そのようなことも含めて、しっかりと調整いただいて高校生の学びを第一に考えたものになるように、県教委あるいは各学校一丸となって取り組むべきことであろうと思います。
　他に何か質問等、お願いします。

【小多委員】
○今議論になっている５ページのところで一つ、この話も含めて考えたというか、確か熊本西高校で予備校の講座を開かれて、いわゆる受験指導のプロの授業は面白いですねみたいなところで、ちょっとざわつきましたけれども、ＩＣＴを活用して、垣根を越えてということで、良い悪いではないのですが、例えば一般的にイメージするところの、例えば英語とか数学とか、そういった授業での御指導についても、もしかしたら非常にスペシャルな先生方の授業というのが広く使われるようになったりする。そして、先ほど足立委員からもありましたが、民間のいろんな専門家の方などが指導をされる。その時に学校の先生方、その所属校の先生方が何を担っていくのか、どう役割分担するのかとかいうところが、あまりがちがちに考えずに、柔軟性を持っていくことが今の時代性なのかもしれませんが、その整理をしておかないと、受験指導はもう予備校に丸投げするような話に、極端に行くとなりかねないと考えます。
　それと３ページの大規模校のことですが、事実として今、御説明があった卒業者数の推移見込みがあっての、一定の説得力があるデータをお示しいただいたと思います。ただここで、私なりに考えるべきだと思うことは、この卒業者数の数字が出るもう一つ前段の、県内各地域からの人口移動、人口動態という、もともとのところと、ここ１０年２０年の高校を巡る教育環境の、地域ごとの違いのようなところが、おおもとの人口の動き、子育て世代、それを控えた世代が、熊本都市圏あるいは熊本市に集中しているという現象があって、卵か鶏かではないですが、その関係性があって、そしてその結果こうなっているから高校がこうであるのか、高校がずっとその状態であるから人口的にもこういう

見込みを上回るような、おおもとの土台としての人口がそうなっているのか、その分析まで踏み込む必要も、もしかしたら今回、県立高校についての地域の関係性やあり方ということを、これまでの再編整備よりもさらに冷静に地域との関係性ということは重視して、議論検討なさっていると理解していますので、そのあたりはこの文言にどう盛り込むかは別にして、問題意識としては持っておくべきところかなと考えます。

【音光寺委員】
○私も同じ意見です。今出していただいたのは熊本市の高校ですけれども、やはり今、郡部の高校が直面している定員割れの減少は、何に起因しているかということがはっきりしないと対策もなかなかできないと思います。だから最初に私は、そういう意味で今までの進路状況の過去何年間かを分析していただけないかと言ったわけです。ただ単に人口減少だけではなくて、進学先を求めて熊本市のほうへ流出されている方もいるのではないかなと、特にこの前もお話したように私立のハードルが下がりましたので、それによって、熊本市内を希望する生徒数が郡部から増えているのではないかとも考えられるので、そうすることによって、熊本市以外の各高等学校の戦略も見えてくるのではないかなと思いますので、今回ここに盛り込まれなくても、是非そういうことを校長先生方で共有される必要があるのではないかと思います。

【半藤会長】
○郡部の高校の定員割れ問題については、人口動態みたいなものと深く関わりますので、その辺りの緻密な分析が必要だという御意見であるかと思います。なかなか、どういう町に住むのか、それはどういう理由によってなのか、ということを細かく精査することができないにしても、継続的なウォッチングをすることで、地域の高校のあり方みたいなものを考えるヒントになることは十分あろうかと思いますので、その辺りは重要課題として注視していかなければならない問題だと認識できると思います。
　他に何か資料について御質問等がありましたらお願いします。

【橋口委員】
○ＩＣＴに関してなのですが、今、総合選択制のところだけ、ここでは選択科目ということがあるので、ＩＣＴを活用した選択科目と書いてあるのですが、ＩＣＴは、多分、他の併設型中高一貫教育とか普通科でも今から活用していかないといけない部分だと思っております。ここに載せる必要があるか分からないのですが、どこか全体的なところでも、ＩＣＴ教育というものを載せたほう

がいいのではないかと感じております。
【半藤会長】
○おっしゃる通りかと思いますが、この辺り事務局なにかございますか。ＩＣＴを活用した多様なプログラムのあり方みたいなものは総合選択制ではなくてもいろんな学校に言えることではないかということではないかと思いますが。

【事務局】
○５ページの資料に総合選択制に特化して、ＩＣＴの活用について記載させて頂いておりますが、今、委員から御指摘があった通り、ＩＣＴの活用については総合選択制だけではなく、全ての授業においてＩＣＴを活用していく方向で推進して参りたい、取り組んで参りたいと考えております。

【半藤会長】
○明確な御回答をいただいたと思っております。

【越猪委員】
○今、事務局から明快な御回答がありましたけれども、その際に、特に郡部、旧熊本学区以外の学校の整備ということを、特に気にかけていただいて、取り組んでいただければという要望でございます。

【末次委員】
○先日、２つの高校を見せていただきました。今、御意見の中にもありましたが、適正規模と特色ある学校づくりという両方の観点から見たときに、私が住んでいる人吉球磨においては、今までも２割程度が、郡市以外の学校に進学するというような状況でございました。先日、球磨中央高校の特色ある学校づくりという、地域と本当に密着した総合選択制の中で生きているなと感じたのは、実際に中学の校長先生方にお聞きしても、流出の割合が、横止まりになっている、どちらかというと２０％よりも少なくなっているというようなお話を聞きました。これはやはり地元に残る、要するに、地元の高校の先生方の御努力もあるでしょうし、魅力ある学校ができているのだなということを痛感しました。ただ、専門的ないわゆる特化した看護学科や、スポーツの特色あるところなどについては、以前と変わらない。そういう意味で、今、郡部に焦点を当ててというようなお話も出ておりますので、是非具体的に精査していただくと有難いかなと思います。

【半藤会長】

○ざっくりとＩＣＴを活用するということだけではなくて、都市部の学校においてＩＣＴを活用するあり方と郡部の学校でＩＣＴを活用する、そのコンテンツは自ずと違いがあっていいだろうという事ですし、むしろ越猪委員の発言からすれば、より郡部にはＩＣＴを活用する可能性が大きく広がっていくだろうということかと思いますので、この辺りもよく学校の地域やそれから学校の種別等鑑みながら、一律的にＩＣＴの活用という発想ではなくて、よりきめの細かい対応が必要だろうという御意見かと思っております。しかと受け止めるべきものだろうと思います。

　他にご意見いかがでしょうか。

【音光寺委員】

○すみません、５ページの各成果と課題のところなのですが、特色ある学校づくりのところで、この前、球磨中央高校を見せていただいたのですが、本当に子どもたちが主体的に意欲的に学んでいる姿がうかがえました。やはり生徒が変容しているとか、生徒の姿としてこういう成果が表れているというところも出していただいたほうが、結局見た目で、こんな学科になってこうなりましたよとだけでなく、こういう生徒の姿が見られるようになったとか、子どもが成長できるとか、そういった面は、もう少し分かりやすくしたほうがいいのではないかと思います。課題もあるとは思うのですが、成果の部分ももう少し出していただいたほうが、せっかくあれだけ子どもたちが育っているのに、先生方も子どもたちも頑張っている姿が、再編整備によって、こういうふうに良くなったというところをもう少しアピールされたほうがいいのではないかなと思います。

【奥田委員】

○成果と課題のところについては、いただいているもので気になるところはございませんでした。先ほど他の委員からも御指摘のあった中学校卒業者数の推移について、どういった原因で推移しているのかについては、高校があるから流入があるのかという分析等が必要かと同じく思ったところです。

【小多委員】

○総合選択制でお示しいただいた参考Ｂの表ですが、重箱の隅をつつくということではないのですが、全体を並べて記載されていますとおり、本当に現場の先生方の努力や創意と工夫で、一定の体制を維持なさっているということは読み取れるのですが、その中でも例えば矢部高校の農業あるいは林業系の２学年の科目は、あえて言うならば半減していたりするわけです。いわゆる学科の特

性とか将来の進路とか、例えば、もともとその林業とか農業のコースを選ばれる生徒の減少が著しいなど、いろんな要素があると思います。その中で、まずは本当に先生方が創意工夫や努力をなさっているというところは、今後もそのような形で頑張っていただきたいし、それは胸を張っていただいていいところだと思うのですが、その上で学校としての体制や特色をきちんとアピールして、維持していくというか、形にしていくという意味では、努力などではない、もう一つシステマティックな、仕掛け仕組みとして、端的に言うと、人の手当てといったものが一定担保されないと、厳しい状況も考えられます。決して先生方の努力とか、そういったものを否定するわけではないのですが、それを後押しするような人的な手当てや体制を、今後の提言にまとめて示すとすれば、学校教育の様々な現場で、マンパワーをどう拡充していくかに尽きるということもあると思っております。繰り返しますが、その努力云々を否定することは決してないのですけれども、もう一つ、その先を見通した体制づくりといったところが明確にあったほうが、今後、例えばその総合選択制といった特色づくりについても、この間、熊本西高校あるいは球磨中央高校で見せていただいたときも、先生方のお一人お一人のスキルとか御経験とか、そういったものがフルに生かされて成り立っていると思ったのですが、あえてそこで思ったのは、この先生がその立場でいらっしゃらなくなったらこの形はどう続くのかということも感じました。そういった意味で、もうひとつ踏み込んだ仕掛けといいますか、体制づくりでどういったお考えがあるのかということを確認したいと思います。

【半藤委員】
○事務局にお答え出来る範囲で見解を伺えたらと思います。マンパワー等、継続的な体制づくりも必要ではないかという御意見かと思いますが。

【事務局】
○私自身、以前総合選択制を導入していた学校に勤務した経験もございますので、その経験の中で今の委員の御指摘に対してお答えさせていただきたいと思います。

総合選択制を導入している学校につきましては、教育委員会から人的支援を行っております。そういう中で少しでも生徒が自分の希望に合った、あるいは選択したい科目が開講できるように工夫を凝らしながら、教育課程を編成しているところでございますが、課題があるのは事実だと認識しております。教職員のリーダーシップなど、その他いろいろと課題が出て来るところですが、委員の指摘を踏まえながら、今後の総合選択制のあり方等については検討して参

りたいと思います。

【半藤会長】
○マンパワーはどこも豊富にあるにこしたことはありませんが、なかなか思いどおりにいかないことも各方面に見られる訳です。それを嘆いているだけではどうしようもありませんので、いかに出来ることをやるかという発想で、皆さん取り組んでいらっしゃるのだろうと思います。そういった中で、今、御意見にもありましたように、学校の魅力の発信にいろんなことを考えていったらいいのではないかということだろうと思います。私も意見をお聞きして思ったのは、やはり高校生は自分を伸ばしてくれる学校に行きたいでしょうから、こう伸びたという結果を分かりやすく知らせることは、学校から提供する情報としては、大事な公表すべき情報になるのではないかと思います。これまでは受験の結果とか、各種大会の結果などを示してきた訳ですが、それ以外に学生がこう伸びたというものを可視化する方法はないのか、３年間でこうなったというような指標はないのか、あるいはそれを開発するにはどうしたらいいか、そういったことも一つの研究として大事ではないかと思っています。

【吉永委員】
○今、半藤学長がおっしゃったことに関連するのですが、郡部の学校も一生懸命、職員・校長あわせて努力されておりますが、そういったものが進路を決めるときの、中学校の教員もしくは中学の子どもたちになかなか伝わってないという現状があるのではないかと思います。ちょうど今、学校説明会が行われている時期です。そういう中で話を聞くと、子どもたちが高校を選択するときに、一つ大きなものは私立高等学校の就学支援金ができて、公立高校と私立高校の垣根が同じくらいになったということもあり、経済的に子供だけでなく親にもかなり影響を与えているのだと思います。それから高校の良さや郡部の高校の良さを知るときに、情報が伝わらないということは、その提供する側、県立高校が努力をしていない訳ではなくて、周知する方法が、ある程度、予算額の中で限られているのではないかという気がします。それと比較すると、私立高校はかなり積極的にアピールをされている。例えばテレビでもそういうコマーシャルを見ることがありますけれども、県立ではそれはたぶん無理だろう。ですから限られた中で努力されているけど、なかなか中学校に伝わっていかないという現状もあるのではないかという気もします。それに関して質問なのですが、そういう県立学校がアピールするような、何かそういった限られた予算があるのかどうか、分かる範囲でお答えいただきたいです。

【事務局】
○魅力創造発信事業につきましては予算化をしております。２パターンあり、各地域で連携して取り組む方法と、特に小規模校については独自に取り組むことにつきまして予算をつけている状況です。確かに私立高校のように大きな予算ではないのですが、例えば地域で連携してパンフレットやポスターを作ったり、最近ではドローンなどを使って、分かりやすい学校紹介をしたり、いろんな工夫を各学校あるいは地域の学校が連携して取り組んでいます。ただし、委員がおっしゃっていますように、なかなかそれが中学生や中学校の先生方に伝わっているかどうかが、私たちの課題であると考えているところです。今後、情報発信の方法についても工夫して取り組んでいきたいと思っております。

【半藤会長】
○資料１の成果と課題については、整理されたものの中に、今議論したようないろいろな細かく考えなければならないことがあるのだと思いますので、教育委員会にも確認していただいたうえで、基本的にはこのような形で整理させていただいてよろしいでしょうか。

【足立委員】
○週末に大分であった産業教育フェアに参加しまして、ＳＰＨの活動報告を初めて聞かせてもらいました。その中で、「ＩＣＴの活用により小規模校の課題を改善し」という文言が、どうも違和感を覚えまして、私としては、例えば「ＩＣＴの活用により小規模校の特徴を活かし教育の充実を図ることができるよう」というような印象を受けました。それぞれ自分達の特徴を活かしている様子を見て、課題を改善するＩＣＴというより、もっといい方に元気が出る様な表現のほうがいいのではないか。これは事務局にお任せします。

【半藤会長】
○確かにおっしゃるように、そのほうが希望を感じられるように思いますので、この辺の御意見も踏まえて必要ならば修正し、素案にしていただければと思います。事務局よろしいでしょうか。
では基本的にはこのような形で整理するということで、御了解お願いします。
　それでは次の議題であります。「魅力ある県立高等学校についての考え方及び今後の取組の方向性について」です。事務局より簡単に御説明お願いします。

【事務局】
○それでは魅力ある県立高等学校についての考え方、今後の取組の方向性につ

いて御説明します。前回の会議では、魅力ある高校づくりに向けた取組の方向性について、学校の特色や強みを活かす取組みに賛同する御意見のほか、多様な生徒がいる中、個別のサポートなどの丁寧な教育という観点も必要ではないかという意見が出ておりました。

こうした検討会での意見を踏まえ、改めて取組みの方向性や具体的な取組案を作成したものがＡ３の資料２でございます。なお、資料につきましては基本的に、今後の魅力化のための具体的な取組みを整理するためのもので、本日御協議いただき、中間報告としてまとめたいと考えております。最終的な報告書としては、この資料に記載しました今後の重点的な取組みの他に、不断の取組みとして行っていくべき高校教育の方向性や取組みも、更に肉付けをして、報告書にはまとめる予定でございます。それにつきましては、次回の会議で御協議いただきたいと考えております。

それでは資料の２－１をご覧ください。中央に記載している取組みの方向性については、前回お示ししたとおり、５番目としてグローバルに活躍する人材の育成を加え、６つの柱といたしました。またⅥの中に少人数学級編成の検討も追加して入れております。なお、前回の会議ではＩＣＴ活用が今回の資料でいうⅢ、Ⅳ、Ⅵと３つの項目にわたって記載されており、整理したほうが良いのでは、という御意見をいただいたところです。しかしながら事務局といたしましては、ＩＣＴについては今後多くの分野で広範囲に活用されていくことが予想されますので、この点につきましては前回の案を踏襲し、複数の取組の中であげさせていただいております。

右側の主な取組（案）をご覧ください。①から⑭まで記載しておりますが、そのうち⑫のＩＣＴの環境整備につきましては、既に今年度、整備中でございます。また⑬についても、今年度には県立学校施設長寿命化プランを設定する予定でございます。それ以外の取組について、別紙にて御説明をいたします。

資料２－２をご覧ください。１２の事業を記載しておりますが、その内、①⑤⑥⑩については、全ての高校を対象とする事業でございます。入試制度を検討する⑭を除きますが、それ以外については、対象を絞って実施することを想定しております。

まず、１番目の熊本スーパーハイスクール構想でございます。これは国の中央教育審議会の答申に基づき、今後作成することが想定される、各高校が目指すべき学校像いわゆるスクールミッションに基づき、各高校の特色を明確化します。そしてその上で、分野ごとにスーパーハイスクールとして位置づけ、その魅力を発信する事業です。例えば○○高校は科学分野でのスーパーハイスクールなどのそういったイメージでございます。各高校の特色は一目で分かるパンフレットを作成する他、生徒が作成する学校紹介動画コンテストを開催する

等情報発信の強化も図って参りたいと思います。
　次の②、③、④は新しい学科等の設置の検討でございます。
　まず②ですが、②では従来の理数科と工業科を融合し、教科横断的な学習を特徴とするＳＴＥＡＭ教育の視点も取り入れた学科や、デジタルトランスフォーメーション時代の到来に対応した人材育成のための情報技術教育を行う学科の設置を検討したいと思います。
　次に③ですが、③では現在、翔陽高校と牛深高校に導入している総合学科の新たな設置を検討します。総合学科は普通教育から専門教育に関する科目まで幅広い選択科目を開設し、生徒は自らの興味関心によって選択できるのが魅力です。
　④の国際バカロレア認定校・学科は国際バカロレア機構の認定を受けて、世界共通の大学入試資格、入学資格のための教育プログラムに取り組む学校・学科です。高度な英語運用能力や論理的思考力の育成を図り、グローバル人材の育成を目指します。資料として他県の事例を記載した参考Ｃという資料を添付しております。これは後程、御参照下さい。
　以上②、③、④の事業については対象校の選定も含め、設置を検討していきたいと思います。
　次に⑤の高大連携の推進は、現在、熊本県立大学や熊本大学などとの連携協定に基づき、出前講座を実施しておりますが、今後は海外も含め、県内外の大学との連携を推進していきます。特に県立大学においては、英語力の向上や情報教育分野での連携を深めて参ります。また大学との連携拡大として、高校生が大学の授業を受講した場合、大学入学後に単位として認める単位先取りや、特別推薦枠の導入についても検討して参りたいと思っております。
　⑥の県立高校ＯｎｅＴｅａｍプロジェクトは様々な学科・コースがある県立高校の強みを生かして、複数の高校が連携して探究活動や遠隔授業等を実施し、教育活動の深化を図る事業でございます。多様なネットワークが広がることで全ての県立高校が互いに協力し、高め合う一つのチーム、ＯｎｅＴｅａｍとなることを目指します。なお、令和３年度は、例えば研究指定校同士、都市部と郡部の高校、近隣の高校同士等による、ＩＣＴを活用した連携の取組みを重点的に推進する予定です。
　続きまして⑦番ですが、⑦の地域との連携による未来人材共育プロジェクトは、学校と地域が一致団結して高校生の学びを後押しする為に、地元自治体を始めとする関係者のネットワーク化やコーディネート力を向上させることで、地域人材の育成と地方創生に資する事業です。事業のイメージ図を参考Ｄの資料に記載しておりますのでご参照ください。
　続きまして⑧です。⑧は遠隔授業等による小規模校の教育の充実です。多様

な科目選択や、交流の機会が少ない小規模校の課題を改善する為、他校や教育機関、企業等との合同授業や交流活動の他、スーパーティーチャーを活用した進学指導の充実も図って参りたいと考えています。

⑨ではＩＣＴ教育日本一を目指し、県立高校におけるＩＣＴの効果的な活用をけん引する特定推進校を指定し、先進的な教育の実践や環境整備を行って参りたいと考えております。

⑩は県内のどの地域であっても進学の夢をかなえることが出来る体制づくりとして、スーパーティーチャー等を活用した進学サポートシステムを構築します。スーパーティーチャーが作成した授業動画をオンデマンドで配信する等、受講希望者がいつでも学習できる体制づくりを想定しております。

その他、⑪ではきめ細かな教育を推進するため、少人数学級編成について検討するほか、⑭では外部有識者を交えた高校入試制度のあり方を検討して参ります。

以上が資料２の説明でございます。

引き続き、資料３－１をご覧ください。

国の中央教育審議会の初等中等教育分科会が今月、中間まとめを公表し、今後の高等学校教育のあり方についての国の考えが明らかになって参りました。資料３－１がその概要でございます。この後には、各高等学校の存在意義や社会的役割をスクールミッションとして再定義することや、新しいタイプの学科の設置を可能とする普通科の改革、地域の産官学が一体となり将来の地域産業のあり方を検討して取り組む専門学科の改革が盛り込まれています。また、産業界において、多様な知識・技術が求められる現状の中、重要性が高まっている総合学科の学びの推進、地域や高等教育機関等、多様なパートナーと連携・協働した教育の提供、あるいはＳＴＥＡＭ教育の導入など、本県で進めようとしている魅力化の取り組みと重なる部分が多くございます。本県としては、こうした国の動向にも注視しながら、本県の実情に合わせた取組みを進め、高校の魅力化を図ってまいりたいと思っております。参考までに資料３－２に報告書の本文の抜粋を添付しております。

最後に、資料４ですが、資料４は第１回目の会議で概要部分を御説明しました、高校魅力化に関する中高生と保護者のアンケート調査の結果報告書でございます。参考にしていただければと思っております。

以上が、第２回あり方検討会で御協議いただく主な方向性と取組内容の案でございます。皆様からの忌憚のない御意見をよろしくお願いします。

【半藤会長】

○魅力ある高校づくりに向けた具体的な取組み案を御説明いただきましたので、

イメージを持って、魅力づくりについて議論しやすくなったかと思います。その議論の前に、先日１０月１４日に「熊本県産業教育審議会における魅力ある専門高校のあり方」について、審議会委員として、足立委員が御参加とお聞きしておりますので、参考になるお話も聞けるかと思います。足立委員お願いできますでしょうか。

【足立委員】
〇お手元の資料５の「魅力ある専門学校のあり方について」です。これに基づきまして、各委員の皆さんから御意見を頂いたものを、今度は県立高校あり方検討会の項目に、あてはめた形で御報告します。

まず「夢を実現する力を育む学校」ということで、先程から出ておりますように、ＩＣＴやＩｏＴ、ＩＣＴ機器を活用した遠隔授業や、専門性の高いスーパーティーチャーの活用、コロナ禍におけるインターンシップの更なる深化などが、どういう形で出来るのかということでした。私自身はこの図に描いてありますように、イノベーション人材や、新たなものづくり産業を支える人材、新しいビジネスの創出、高度化・多様化に対応出来る人材など、いわゆる今までとは違った、時代がＷｉｔｈコロナで不連続な形である産業界では、私は尖った人材と言っておりますが、クリエイティブな対応が、意の異なった能力を持った人たちが求められていると。こういうことで、専門高校のあり方ではイノベーションという言葉も出ています。

２番目の「地域で夢を拡げ、地域の未来を支える人材を育てる学校」では、先程から議論にあっているとおりで、課題解決能力や実践力が備わっており、リーダーシップを発揮できることが専門高校の卒業生に多いとか、スーパープロフェッショナルハイスクールなど、学校が地域・企業と連携した教育をもっとやるべきであるとか、小規模な学校だからこそ、教員が生徒達と積極的に関わり合い、地域との連携が図りやすい環境にあるなど。

また「夢への挑戦を支える学校」では、同じようにＩＣＴ機器の整備や活用ということでございます。私の意見としては、私が会長をやっている熊本県情報サービス産業協会と熊本県高等学校教育研究会の情報部会の連携を保って、文科省が示している情報の担当教員の専門性の向上ということで、私どもがやっている研修講座や、私どもの会員が教育現場に行ってサポートするＩｏＴのイノベーションリーダー研修には、現在、３人の情報担当教諭が受講されています。こういう意味では機器ばかりではなくて、まさにここに書いてある教職員の資質の向上や効果的な人員配置ということも、すでに始まっているのではないかと。こういう話をさせていただいたところです。

【半藤委員】
○私どもの議論に関連することということで、御紹介をいただいたところでございます。それでは、ここまでの御説明等につきまして、自由に御発言いただければと思います。

【越猪委員】
○今、足立委員の御説明を伺いまして、「魅力ある専門高校のあり方について」という絵を見ながら考えたのですが、専門高校におきましては、こういう横の連携、それと足立委員のところの組織等との連携、そういうものがあって、そして産業教育審議会であり方が検討されていると思っています。ただし、私たちも迂闊だったのは普通科については、そういった議論がこれまで一切されてこなかったような気がします。専門学科・コースを持つ高校のあり方と同じように、今、国の方も普通科について、いろんな改革を求めておりますので、普通科に関して作業部会なり何なり設けて、もう少し突っ込んだ話ができるような仕組みを作っていかなければいけないのではないかと思ったところです。

また、先程の事務局の説明につきまして、非常に夢のある薔薇色の提案だったと私は思っているのですが、その一つ一つを細かく見ておりますと、先程話がありました、人や施設の確保など、そういった前提条件になるものが、かなり必要になってくるのかなという感想を持ちました。先程、吉永委員からありました、私立高校については、授業料が実質無償化状態に今なっているということで、熊本県に限らず、郡部から都市部の学校に流れるような現象というのは、日本全国で起きているのではないかと思っています。それで、私立高校については、歴史的に見るとかなり厳しい時代に、かなり厳しい生徒たちを受け入れて自分たちが支えてきたと。さらに、遠方から通う子どもたちについては、スクールバスを回して、丁寧に対応してきたと。そういう積み重ねがあって、校舎も綺麗になり、バスもドアｔｏドア（自宅から学校まで）で整備されてきた。そういう中で今を迎えられたので、それについて公立高校がいろいろ言うことでもないのですが、そういう現状の中で、都市部と都市部以外の地域に大きな格差が生まれつつあって、なかなか元気がなくて、学校自体や先生たちが、かなり疲弊しながらやっているようなところもあるのではないかと思っています。ですから、このあり方検討の１つの焦点としては、そういう地域の学校の課題や、それを前向きに解決するための知恵を一つ絞るということが、大きな論点の一つではないかと思っています。

もう一つでございますが、学校はいわゆる知識だけで子どもたちが集まるようなところではないと思います。先程、部活動の話が出ましたけれども、このプランの中に体育系の、いわゆる部活動とかそういったものが、前回のものか

ら消えています。そしてどちらかというと、学問中心の学校で魅力づくりをしようというような視点が見えるのですが、そこのところが何故、消えてしまっているのかということを事務局にお尋ねしたいと思っています。

最後ですが、今日御欠席の田中委員が、前回「地域には伝統があり、歴史があり思いもあり、そういったものの連携を活かしながら強みを磨いていく」「熊本地震からの学びが反映出来ないかと考えている」といった御発言をされておりまして、「高齢社会が迎えた災害として、熊本地震からの学びは全国の学びである」という御発言をされています。阪神淡路大震災が起きた後、兵庫県の舞子高校に環境防災学科が７年後にできており、東日本大震災の後には、宮城県に多賀城高校が防災科学科を５年後ぐらいに設置されています。私は、あれだけの苦労があった熊本地震を語り継いで、次世代を担っていくような子どもたちの育成を、熊本県がやらずにどこの県がやるのかと個人的には強く思っています。是非、熊本県に防災学科コースを設立するという視点で、何か取組みを考えていただければと思います。そうすると、阪神淡路・東日本・熊本地震の三つについて、若い人たちのネットワークもできますし、いわゆる日本から世界に高校生がいろんなものを発信する大きな力にもなるのではないかと考えているところでございます。

【半藤会長】
○はい。示唆に富んだ御発言と思います。事務局、何かお答えいただけることはありますか。

【事務局】
○色々と御意見いただきましてありがとうございます。なぜ部活動が消えているのかということと、学科コースのことだと思うのですが、今回は主な取組みという切り口で挙げさせていただいています。部活動につきましても、どうＰＲしていくかについては、例えば熊本スーパーハイスクールのところで、部活動のＰＲができるのかなと思っております。また、学科コースにつきましては、今回、具体的には、この段階では盛り込んでおりませんが、他にも多種多様な学科がございますので、現在の報告書の中には、新たな学科というところで盛り込むことができるのかなと思っております。ここでは、主な取組みということで御提案させていただいているところです。

【越猪委員】
○新しい学校・学科コースの設置・検討ということも取組みの方向性として書いてございますよね。新しい学校を作るということについては、現実的な話と

して、検討をされるということなのでしょうか。例えば、バカロレア校のお話がありますが、これについては中高一貫校でないと、恐らく日本全国見た場合でも、成功しないと思っているのですが、そういった具体的なことがイメージとして非常に鮮明に書かれているにも関わらず、中学生とか地方の郡部の子どもたちが、高校の魅力を語るときに「やっぱりあの先輩があの学校に行って活躍しているから、自分もあそこに行きたいな。」とかいうそういった視点が弱いのではないかと素朴に思います。ですから、入試の改革が当然セットになるのでしょうが、先程、末次委員の方からお話がありましたけれども、地域の学校、例えば人吉・球磨には色んな才能を持った子どもたちがいますが、熊本市内の強豪校に引き抜かれてしまう。地元で南稜高校のように対抗する学校ができて、残したいと思っても、それがなかなか残れない状況もある。もう少し地域に重点的に資源を配分すると言いますか、応援をするような取組みが方向性として明記されても良いのではないかという趣旨でございますので、御検討いただければと思います。

【半藤会長】
○魅力ある高校づくりということで、まずは総花的に議論するということもあるでしょうが、現状の分析に基づいて課題をしっかりと受け止めて、それに向けた改善を図っていくために、集中的にこの枠組みを活用するということも必要だろうという御意見だと思います。おっしゃる通りかと思いますので、特に課題である郡部の学校の魅力づくりに向けた議論は、より丁寧かつ厚みのあるものに、提言していく必要があると思います。他に御意見・御発言ありましたらお願いします。

【音光寺委員】
○素晴らしい提案だと思います。県立高校で強みを活かすということで、ＯｎｅＴｅａｍプロジェクトと書いてあり、実際中学校からすれば、公立高校だったら例えば普通科だったらどこでも同じような教育が受けられるというのが、昔の当たり前の考え方だったのです。しかし、今そういった状況が変わってきて、大学進学ならば熊本市内の高校に行かなければいけないということが、保護者にも子どもたちもイメージができあがってしまっているのではないかと。やはり県立高校の先生方も異動がありますので、進学校で教鞭を取られた方が、郡部の方に行かれるかと思います。そのノウハウを異動先の学校で実践できるかというと、その辺のところが、私たち中学校現場には見えてこないのです。だから、そういうノウハウを共有して、うちの高校ではこういう段階を踏んで、大学進学を目指しますとか。そういった、県立高校としてこういう流れで生徒

を育てていくというところが見えた方がよい。私立高校はそういったところは明確にされている。だから安心して私立高校に進学されるということが段々流れとしてできてきているのかなと思います。子どもたちや保護者のアンケートを見ても、やっぱり進学先がはっきりしているとか、そういう手立てがはっきりしている高校を希望するところもあるのではないか。

もう一つ、今、越猪委員からありましたが、部活動についても、この部活動だったらこの高校に行った方がいいとか、そういうことがずっとあっているのですが、やりたい子はいっぱいいるわけです。例えば、金足農業高校については、テレビで知ったのですが、秋田県全体でレベルアップをするために野球の指導者を集めて、講習会などをして、技術のノウハウを連携して、底上げをしていっていると。県立高校の強みはそういうところではないかと思います。授業だけでなく、部活動にしても、その指導とか演劇とか音楽分野とか色んな子どもたちがやりたいことがありますし、特に芸術分野には専門家の先生がいらっしゃるので、選択授業でもそういうことが共有されていると、子どもたちは「地元の高校に行っても、そういう教育を受けることができる」という安心感が出てくるのではないかと思います。だから、そういったところをもう少しＰＲされると、保護者や生徒に、地元の学校に進学しようという理解ができるのではないか。地元の学校の強みは何かということについては、先ほどからありますように、伝統的な学科があるパターンと地域性のパターンとあると思いますので、そこで特色ある学校づくりのための学科がしたいというならば、そういう窓口を広くしていただければ高校の特徴ができるのではないかと思います。本当に素晴らしい取組みが書いてありますので、ぜひ実効性があるようにお願いしたいと思います。

【末次委員】
○関連して、要望も含めてですが、この１枚の中に本当に緻密に網羅されていると思います。その中で「県立高校像」というのが左側にあるのですが、その２番目はとても素晴らしいことだと思います。「地域で夢を拡げ、地域の未来を支える人材を育てる学校」という大きな県立高校像があるわけですが、これをより具体化し、方向性であり、取組みに繋げていくという部分が見えるようで見えないところがたくさんあるのかなと感じています。是非、先ほど委員もおっしゃったように、県立高校の良さ、公教育の良さがいきるようなところで、もう少し見える具体的な文言が欲しいと感じたところです。

【半藤会長】
○地域の高校の課題を考える時に、私は高校だけで解決策を考えても、なかな

か解決できないのではないかと考えています。地域が地域にある学校を育てていく、地域総がかりで学校を育てていく、深く学校と協力するという意識が地域に生まれることが極めて重要ではないかと思っています。学校側からすれば、あまり地域の人たちが入ってくることを歓迎しないということも聞いたことはございますが、もはやそうではなく、地域と地域の学校は一つ、それこそＯｎｅＴｅａｍという言葉がありますが、そういう意識で、地域総がかりで学校を作っていくという雰囲気を醸成していくためには、地域を巻き込んで、地域をその気にさせるような仕掛けづくりが重要になってくるのではないかと思っています。

他にご発言等ございましたらお願いします。

【小多委員】

○いくつか質問と意見を併せてです。まず全体的に、それぞれの項目が複雑に多様に絡み合ってそれぞれの学校の特色になっていくのだなというイメージはできています。一つあるのが、総合学科の設置検討なのですが、これは必ずしもイコールではないかもしれませんが、総合選択制について、今後の方向の中で県教委が示していらっしゃるように、生徒減、教員減という状況の中で制度の運用がなかなか難しくなっているという課題意識をお持ちだと思います。総合学科の高校についても、ある意味、学校まるごとそういう仕組みかと思いますが、翔陽高校は、大津産業から変わって、私の記憶だと、当時非常に画期的な総合学科誕生ということで注目されたと思います。その後も後発の学校もありますが、県教委としてどう評価なさっているのでしょうか。その後の広がりや定着といったところで、何らかの課題もあったかと思います。その中で、今の時代の必要性として総合学科がまた注目されて、先ほどもありましたＩＣＴの活用等の可能性が広がるという部分もあるかと思うのですが、トータルで見たときにハードルが高い要素があるのではないかと想像するのですが、そのあたりはいかがでしょうか。

また、⑪の少人数学級編成の検討があります。これは決して矛盾することではないと思うのですが、適正規模を「一定の人の塊でこそ教育は」という大枠の中で考え、この少人数学級をどう位置付けるのか。必ずしも矛盾するものでもなく、両立するものと思いますが、いわゆる学級編成としての対応と、それとは違う声の対応というか、いろんな方法があると思います。その中であえてここに少人数学級を示されていることと、もう一つ教えていただきたいことが、ここに書かれているいろんなことが学校の特色ではありますが、そこに通われる生徒一人ひとりの特性や個性をどう伸ばせる学校になるかということが問われていると思います。その手法として、ＩＣＴの活用もそうかもしれませんが、

少人数学級の編成で意図するものと、もう一つ大前提となるのは、生徒一人一人に対する声への対応。そういう考えでいかれているのか。

最後に、先ほどもご意見ありました防災学科の新設については、私も非常に関心があり、必要性を感じているところです。以前、舞子高校や多賀城高校など、全国の防災学科で学ぶ生徒、熊本からは例えば第二高校に生徒が集まって、阿蘇で合宿があり、そこで講師として関わる機会がありました。そこでは、非常に意味のあることを、本当に社会を見つめて学ぼうとされている生徒の意欲などを実感できたのですが、防災については私なりに、この間報道の立場と関わっている中で感じることがあり、防災ということを特別なものとして深めていくことも、必要だとは思うのですが、あらゆる場面、あらゆる社会活動をしていく中で、どのように防災を絡めていくかを社会人として、きちんと捉えていくことが、より一層、必要になっているということは、おそらく皆様方も熊本で生きる一人ひとりが各場面、ある場面で実感してきたところだと思います。そういったところで防災を「防災」という面だけではなくて、教育の場面でどう展開して、それを一つ深める場面として、専門学科の新設を私も是非実現してほしいなと思うのです。防災というワードを強く意識しながら、先ほどの話に戻るのですが、一人ひとりというものを学校の学ぶ場面でもそうですが、最終的に社会に出た後に、支える側支えられる側になったときにどうするかということが非常に問われている時代だと思って、それがイコール教育で、何らかの変わっていく大きな要素になるのではないかと、私見ですけども、非常に強く思っているところでございまして、そういったところが個々に、うまく散りばめられたらと思います。

【事務局】

○１件目の御質問の総合学科について、お答えします。翔陽高校の総合学科は、平成８年にできていると思いますが、本県が平成３０年度まで行ってきた再編整備と同じ時期にできた全国の学校を見ますと、平成２０年代というのは全国で総合学科として新しい新設校ができている学校が多い時期かと思います。そういう中で、翔陽高校の場合は、クラスの規模的には大きい学校でございます。そのこともあって農業・工業・商業・家庭と非常に幅広い分野の中から単なる選択ではなく、先ほど総合選択制が話に出てまいりましたけども、それよりも、もっと柔軟に生徒たちが入学時から自分の出口をイメージしながら選択できるという強みがあるかと思います。そういうことが、地域の多くから評価されて前期（特色）選抜あるいは後期（一般）選抜において、非常に多くの中学生が受検するなど評価をいただいているところでございます。ただこの総合学科というのは一定規模、さきほど申しました翔陽高校の場合は１学年７クラスです

が、この規模が小さくなってきますと、やはり教員の人数の関係で、選択できる分野が限定的になってくると、総合学科としての強みが発揮できるか、そのあたりに非常に難しい点があるのかなと。事務局としては考えているところでございます。

○少人数学級の編制について、今回追加して記載しております。趣旨としましては、そこにありますように、今かなり多様な生徒が入ってきており、細かに対応するという意味での少人数学級編成を第一に考えています。
【牛田局長】
○いくつか御意見をいただきましたが、まず総合学科については、翔陽高校が今、このような形で成果も挙げておられるし、現場の校長先生方としても総合学科ならではの良さ、いわゆる３年間かけて専門分野を学ぶ専門高校とは違って、２年次から選択しますから、当然専門性の深さとか、そういう意味では、３年間専門学科として学ぶ学校に比べればやや不利なところはあります。ただし、今の子供たちの状況を見ると、色んな学びに触れながら自分の適性を見ていくということが総合学科のメリットであり、そのことが将来の進路あるいは進路先でも活躍するのかなという現場の話が聞こえてきます。現実的には、総合学科でない学校でも、例えば北稜高校では普通科・商業科・農業科があり、農業科には造園もありますし、そして家庭科系の学科というように総合学科と同じような選択肢があるのですが、あくまでも専門学科が集まった学校ですので、中学校の時から学科を決めなければいけないということで、そのへんが大きな違いがあります。子どもたちの高校に入った後の状況などを見ますと、やはり高校の学びの中で最終的に選択することは１つのあり方としてはありえるのではないかなと、ただ全部がそうなってしまいますと、専門性を深める学校は学校でまた必要ですので、やはり工業は工業として３年間学ぶ学校であるとか、住み分けをしなければいけないのではないかということで今回、総合学科についてもまた検討したらどうかということでございます。
　次に、少人数編成については、視点はきめ細かな、個別最適化に近い教育をどうするかということではないかと思っています。これも現場の校長先生にお聞きすると、ある学校では４０人募集で、結果的に入学者は３０人であった学校は、子供たちの多様な状況を見ると３０人で良かった、これが４０人になれば、それは募集という意味ではうれしいことですが、担任の負担や子供たちへ提供する教育のきめ細かさという意味では、どうだろうかという声も出ています。すべての学校をそうするかどうかということはあるのでしょうけども、そういう意味では、やっぱり３０人とか３５人とか少人数にするということは、県立高校としてきめ細かな教育をするというメッセージにもなると考えていま

すので、たまたま実態がどうであるかということとは別に、教育委員会として、あるいは県立高校としてのメッセージも含めて個別教育もあるという意味で、これからの高校のあり方としては１つの検討材料ではあると考えているところです。

また、防災学科等についても先ほど越猪委員や小多委員からもありましたが、今回例示的に書いている資料２－２にはすべては挙げておりませんので、また御意見を踏まえながら検討するということもあり、今ありました防災等の学科やコース、カリキュラムの話や、例えば、多様な子供たちの中での１つの方法として、他県では学びなおし的な学科コースの検討などもあっていますので、資料２－１には新たな学校・学科コースの設置と書いてありますけども、今回御意見等もいただきながら、本県の教育も踏まえてどんなものがいいのか、それは学校がいいのか学科がいいのかコースがいいのか、これから検討をしていくことになるのではないかと、そういう意味で皆様方からいろんな意見をいただきたいということでございます。

【半藤会長】

○資料には書き表されてはいないものの、その裏にはいろいろと考えておられることだと思います。総合学科については、生徒からすればメリットがあるということで検討をしていきますが、これを作ればいいという話ではなくて、ここに掲載のある色々なものを合わせ技で使いながら、魅力ある総合学科の学校を作っていこうということだと思います。また少人数については、高等教育に携わる者からすると、初等中等教育の学級は少人数なのかという事もあります。３０人規模というのは、もっと小さい単位でやっている大学の者からすると、生徒数は多いよりは少ない方がいい、教育上の一般論として少人数が望ましいということはあろうかとは思います。ただ大学の立場からすると、学びの目標とか授業内容とか、あるいは何を学生に身につけさせたいかということと、学生の人数はリンクすることがありまして、スケールメリットが効果を与えるということもたくさんありますから、単純に少人数ということでもなく、その学びの目標に応じた形で柔軟に生徒数のあり方を考えていくということも今後は必要になってくると思います。基本路線として、少人数ということを打ち出されるのは方向性としてはよろしいのかなという感じがします。

それから防災学科の提案もございました。具体的なものとして、各方面に大変参考になろうかと思いますけれども、その一方で、どこで色んな災害に遭うかというのは、人と場所を選びませんので、専門家を育てるだけでは不十分で、すべての者を対象とした学びの教育が必要なことは、言うまでもないことでしょうから、これも色々な取組みの中に入れてお考えいただくという事を、会の

要望として受け止めていただければと思います。
　オンラインの奥田委員、今までの議論を聞いて何か御発言ありましたらお願いします。

【奥田委員】
○「地域で夢を拡げる、地域の未来をつなぐ人材を育てる学校」と掲げていただいている点が、方向性として素晴らしいなと思っております。それに関連した主な取組みのところで、スーパーハイスクール構想の１番に関して、その地域との協働を掲げる場合、どういった学校を目指すのかということ自体を地域と一緒に議論していく、それによって地域自体も学び、教育の主体者になっていくということが必要ではないかと思っております。同様に、関連することが７番の「地域との教育研究による未来人材共育プロジェクト」というところで、コンソーシアム等をあげていただき、参考Ｄにあるコンソーシアムの運営マネージャーと書いていただいていますが、こういった連携をするときに、他のマンパワーというか、自校の先生方だけでやっていくというのが大変な場合もあるのではないかと思います。島根県の場合も市町村と、県で人件費を負担し合いながら、そういう人材を置くというような取組みをしています。そういった専門人材も配置しながら、地域との連携を進めていく方がうまくいくところもあるかと思っております。合わせて、スーパーハイスクール構想で、学校の特色を定めたときに、今後育てたい生徒が育っているのかという点を、外部の評価や学校自体の評価と一体的に進めていくことも必要なのではないかなと考えています。７番の中にもＰＤＣＡサイクルが書いてあるのですが、これから行う各種取り組みの全体としても必要になってくるところかと思います。
　最後に、６番の高校間連携ですが、今年度から内閣府や文科省が学校間連携という仕組みを使って、高校２年生の１年間だけ、地域に入学できるという事業も始めておられますが、そういった形で、例えば熊本市内に、高校に入学はしたけれども、ほかの郡部の高校に１年間行くというような形の連携だったり、または逆だったりといった、そういった仕組みを活用した連携も考えられるのではないかと思いながら、聞かせていただきました。

【足立委員】
○６番ですが、県立高校のＯｎｅＴｅａｍということですが、球磨中央高校や熊本西高校にいった時の私の印象は、会長も似たような印象を持たれたと思うのですが、学校内での学科の横の連携はどうなっているかということです。特に我々の産業教育振興会の場合は、色々な中に普通科や専門学科があるということで、私としては産業教育振興会の中に、各高校の中での連携をどのように

取ったらいいのだろうかという話は、そういうものの研究をやってはどうだろうという提案はしたいと私も思っています。この県立高校ＯｎｅＴｅａｍは学校の中がＯｎｅ　Ｔｅａｍになり、高校間連携はＯｎｅ　Ｇｒｏｕｐでもいいのではないかと思います。Ｏｎｅ　Ｔｅａｍ&Ｏｎｅ　Ｇｒｏｕｐにして、まずは高校の中をＯｎｅ　Ｔｅａｍにできないかと感じております。

それから、その先進的なＳＴＥＡＭというもの、ここでＤＸが出てきますので、私どもの領分なのですけれども、この国際バカロレアの資料を見ますと、やはり課題論文だとか、批判的思考の探究など、相当自立性などが求められているところですが、このＳＴＥＡＭのＡ（Ａｒｔ）というのが、これはリベラルアーツだろうということです。これも研究の中で、高校版リベラルアーツということも、先生たちと一緒に勉強しないといけないと思っているところでございます。

もうひとつ、委員の皆様が先ほどから地域ぐるみだと、みんなでやらないといけないとおっしゃって、その通りであるわけですけれども、私どもの立場からすると、オンラインというのはどうしても人間と人間のふれあいが非常に少なくなるものですから、地域との中でふれあうことで、人間力が培われるのではないかと考えております。

それともう一つは、地域の人たちは高校とただそれだけなのかということで、やはりこれからはリカレント教育で、これだけデジタル化が進んできた理由がありますので、地域の方々のリカレント教育の場に、高校はできるかどうかっていうのもひとつの課題ではないかと思っております。

それから、もうひとつでございます。最初の図の「新しい時代に対応した魅力ある学校づくりへ」ということですけど、生徒をもっと前面に出す必要があるのではないかという気がしまして、この新しい時代に対応した魅力ある学校づくりの中に、学ぶ喜びや楽しみなど、そういう文言が入ることによって、この計画は生徒を中心に考えたものなのだという印象を与えるのではないかと思います。もう少し、生徒の頑張りが出たほうが私は新しい時代のものになるような気がします。

【半藤会長】

〇色々御意見または具体的な御提案もいただいていると思います。お作りいただいた資料から、色々と御発言が出るという事は、この資料の中に、そういう事を誘発するようなものが沢山あるのだろうと思いますので、総じて、魅力づくりに向けたプランニングが基本的にはなされているのだろうと考えられます。今頂いたようなご意見等も踏まえて、中間報告案としていただければと思いますが、その点について何か特にこれだけはというような御要望がございますか。

色々意見が出たと思います。具体的なものは、さらに今後、いろいろなものを具体化するときに盛り込んでいただければと思いますが、いただいた御発言の中で、事務局として、反映させておこうということがありましたら、それを踏まえて整理して中間報告案にしていただければと思いますけれども、事務局それでよろしいでしょうか。

【事務局】
○事務局といたしましては、今日出た御意見を基に修正をさせていただいて、会長とのやりとりをしたあと、もう一度委員の皆様に見ていただこうかと思います。
【半藤会長】
○事務局と私とで今日いただいた御意見を盛り込んだ形で、修正案を作りまして、委員の皆様に御提示いただいて、それを中間報告案とさせていただくということでよろしいでしょうか。
それでは、本日の議事は以上でございます。最後、特に委員の方々で御発言ありますでしょうか。なければ事務局にお返しをします。

【事務局】
○委員の皆様におかれましては、長時間にわたり御協議ありがとうございました。それでは最後に事務局の担当から連絡をさせていただきます。

○次回の検討会は来年１月に開催を予定しております。そこでこれまで委員の皆様に御協議いただきました、県立高校のあり方と魅力化の方向性について報告書の案をお示しし、御協議いただくこととしています。また本日、御意見をいただきましたことにつきましては、先ほどお話したように会長との御相談で示したいと思っております。そして、１月に開催をした後に、最終的には２月に報告書を完成させ、検討会から教育長へ報告、そして教育委員会で報告という流れを考えております。また詳細につきましては、改めて御連絡を差し上げたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いします。

○それではこれをもちまして、第２回県立高等学校あり方検討会を閉会いたします。委員の皆様、長時間にわたり大変お世話になりました。ありがとうございました。